古文讀本　一の巻

特40
150

084904-001-9

特40-150

古文読本

大和田　建樹／編

M32

DBB-0169

特40
150

前ぶき

此書ハ。和文和歌を讀み習ふ人のためゝ。古人の作をあつめたるもきバ。まづ近きより入らせんとて。時代の新しきを先ふし。古きを後に志たるもり。講讀の便利をはゝりて。長き文ハよきゝごに。それ二。それ三もゞ〳〵わゝちたりされど。もと續けてかけるものなれバ。無理

特40
150

前がき

此書ハ。和文和歌を讀み習ふ人のためり。

古人の作をあつめたるもの

すり入らせんとて。時代の新しきを先ふ

。古きを後に志たるもり。

講讀の便利をはゝりて。長き文ハよきゑ

どに。それ二。それ三もゞ〳〵わゝちたり。さ

れど。もと續けてかけるものもれバ。無理

なるもあるべし。せんうなし。
毎篇あらたに題をまうけたるハ。おぼえ
やすくとなへやすうゝ志めんためなり。
中略とゝるせるとゝろハ。をと讀本にさ
せんとてうける文ちらねバ。不適當の箇
條。まゝ無用の文句などおかきを除げる
なり。
撰べる材料のうち。悲しき事ゞゝ又ハ空

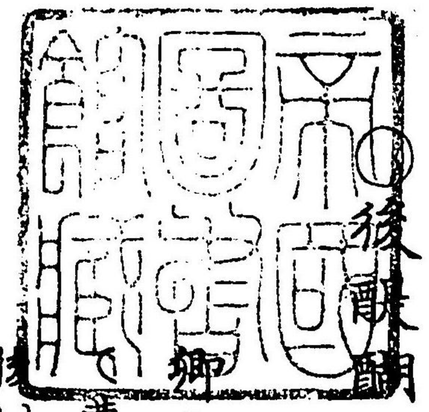
言にすぐる物語などのゝまゝあるも。昔
のをのなれバ止むをえず。これも一つは
當時の人情を見るに足るべゝきバ。ゝと
さゝてあげるもあり。
讀書の目的ハ。一冊の書を讀をたる力も
て。十冊二十冊の書を讀みうるにあり。此
書をまなぶ人ハ。ゝに注意あらまほし。

明治廿二年七月

選者　しるす

古文讀本一の巻

大和田建樹　選



後醍醐天皇（神皇正統記）

准后北畠親房卿

後村上天皇の正平十四年六十七歳なり。卿ハ。後村上天皇の正平十四年六十七歳なり。神皇正統記ハ。ながの國神代より筆ぜらる。

後村上天皇御即位までの事をしるして。

正しき皇統を全く南朝にあることわりを述べられたり。

九十五代。第四十九世。後醍醐天皇。諱を尊治。後宇多第二の御子。御母ハ淡天門院。藤原忠子。内大臣師継のむすめ。實ハ入道参議忠継のむすめなり。御祖父亀山の上皇やしまひ給ひき。弘安十時うつりて。亀山後宇多世をしろしめさるべきなりにをたびく関東に仰せあるまゝ。うば。天命のこゝろうつるべけもくれそれおもひなれどふやにそかて立太子の儀あるべしと。亀山ハこの君をすゑまつらんとおぼしめして。八幡宮に告文を捧さ給たまひうぐ。一の御子儀

あるゆゑなくてすくられぬ儀ありけれど。後二條ぞ居給つゝしぬ。儀ぞ後宇多の御こゝろざしも淺うゝびく。儀ぞえ服ありて村上の例ふよ。太宰帥にく節會ちるぐに出でさせるまひきのちに中務卿をけんぜさせたまふ。後二條世をはやくしまして。父の上皇ちげうせるまひ中ふも。よろぢの君ぞ委附しゆ儀をゐまひる。やゞてまゝけの君の儀めありしに。後二條の一の御子邦良親王居ゐまふぐ。そのときこえゝ。おぼしめしゆゑあるとくこの親王を太

ゐにたて給ふ。うゑ一の法子をさちくはまを
む。法子ゑ儀ゑく傳へ給せ給ふ。も一邦良親
王早世の法事あゝバ。こゑ法ず急継躰たるべ
こそ。ちゝ〳〵おくをまの〳〵くる。このゑ親ヨ鶴膝
の法病ありて。なやふくおぼしめしゆゑを
るべし。後宇多のみぐこそゆゝしゑ稽古の天
にましゝふ。そゑ法流をばよくつぎやさをた
まゝ。なのまさへゐるゝの道を好ミ知を給
ふゝ。おゝがゝもほぶの法事ちけんの。佛
法ゐも法ぐゝろざふくて。もゐ真言をな

らゝせ給ふ。ばゞ先を法皇にうけまゝ〳〵くる。
のちゐ前大僧正禅助に。許可までうけ給ひくる
ゝぞ。（中略）そしちゝびまゝ諸流をもうけさせ給
ふ。また諸宗をもすて給りび。本朝異朝禅門の僧
徒までも内にめして。ぶらはを給ひき。をべく
和漢の道ゝかねあゝゝうれる法事ハ。中ごろよ
りゑ代々ゐこえ法をまゝ〳〵くるにや。戊午
の年即位。己未の夏四月ふ改元。え應と号す。はゞ
めはうゝを後宇多院の法まゝ〳〵ばかをゐすゝを。
ちゐ二ゝをばゝうあゝてぞゆゝゞゞさせゝよ

ひ。それよりふくるのおとくに記録所をおの
きて。つくに起き夜をこめおくらせおもりて。民の
うれひ救きうせひなる。天下こぞりてこれをあ
ぎまつる。公家のふるき法政にうつべきせにて
そなへ。ゆのもいやしきもこのねく歌ひ作りき。の
うりほぶる。後宇多院のくれさせ給えていたし
しの東宮に法方はさぶらふ人々そぞくうき
うえ。ぶ。關東に使節をつかはせ。天位をあら
そふまでの法中らひるにぎりにぎりつまたも東
宮の法事をひきたてやんとものありて。往い

きどほりにはじめやりぬ。元亨甲子の九月の
もを思つるやうく事にはまたこうぐ。う
けゆまりおこるる中にいかひちき事出で
きたりかぐ。大方はおくてやこぬその後か
ぐ東宮かくれ給ふ。神慮にもうれはば。祖皇
の法にまりめふもたぐはせまひりうぞ。お
ぼえ。今ゝそ六の天皇。たぐひちを継脉の正
統ゝ法ぐまらせたまひぬれ。されど坊にも。後伏
見第一の法ゝ。量仁親王居させ給ふ。ゝて元弘
辛未の年八月に。ふゝ都を出でさせ給ひ奈

良の方に臨幸あらしむ。それ、そもそもよろづかで。笠置といふ山寺の邊にうつり宮をしめ給ふ。ろぐ〜なりつぶやもの絨めあつめらる。たびく合戦あらしむ。同じき九月に東國のいくさおこくあはせまゐらせ給ひてさぶらひにくれぬ。他所よりつらしめたまひふ。おもひの外の事いできて。六波羅ならびに承久よりこれ志をつる所ふ法幸なり。法供奉はしり上達部上のをのゝぐ。あるいはこれ所のびかくれるもなり。かくて東宮位につけ申せまふ。次の年

の春。隱岐の國ふうつ志めまゐらせたちもなりかちるこれ遷されまゐらせ。兵部卿護良親王ぞ。山々をめぐり國々城をよほして。義兵をおこしたんとくはぶてたまひける。河内の國よ楠正成といふものあり。其ら〜ろぢ〜ふのうアりしバ。河内と大和ぐにさかひに金剛山とい ふ〜ろよ城をかまへく。近國ををのたらげしのばおづまよう諸國の軍をあつめく攻めしのぶ。かくく守りけきバやすく落とはふあたちぶぜの中みぶれ立ちに次のとり。癸酉の

年しのびて法師にまうして。隱岐を出で伯耆につうきを移ふ。そも〳〵國は源長年といふものあり。法方にまゐりて。船上といふ山寺にうち籠りて。宮をうつくぞ。住まをまうけるかのあうち。軍兵ちばらくハきほひて襲ひやしけきぞ。みちを引びきやしぬ。都ちかき所〳〵にも。法こうろぢある國〳〵のつはものよりぐうち出でつきば。合戰もさびたびふちうぬ。京中ちわぎくちうて。上皇と新主も六波羅にうたうち移ふ。伯耆よりも軍をちしのぼきらふ。ふ畿内近國よも法こうろぢあ

ることぐ〳〵八幡山に陣をやる。坂東よりのぐれるつはもの〳〵中ろ。藤原親光といふものもかの山にそせくほ〳〵まぬつぢく法方ふまゐる輩おほくちうにく〳〵ちう。源高氏やきうえうもむうの義家朝臣ぐ二男。義國といひぐ後流ちう。かの義國ぐ孫ちうしぐ。義氏ち平の義時朝臣ぐ孫ちう。義時等ぐ世と引うて。源氏の号ちうる勇士にちうろをおきうれぐにや。ものもうるやうちうにおれち外孫ちまぢ。うたてう領すうこうろなぐ。ちまうはうひおさ。代〳〵に

兩院
後伏見上皇
花園上皇
新院
光嚴天皇

ちるまでへぐてなくてのこりし。高氏も都へ
ぢ〜のぼせられくるに。うたがひをのがしんとふ
や。告文を書きおきてぞ進発しける。ぢきど冥見
をもかへりみぐ。ぢろがぢりて。海方にまる
る。官軍力をえ〜まくふ。五月八日の事ふも。都に
ある東軍みなやぶれて。あづまへさ〜ろげて
落ちゆき〜に。兩院新帝おちぐくらゆきあり。近
江の國馬場といふ〜ろまで。海方にさ〜ろざ
しなるとぐらうちいでにられぐ。武士ハ
うふまでもちく。おちくハ自滅しぬ。兩院新帝ハ

都にうへ〜ます。官軍さきを守りやしたがくて
都より西ざまにおぐれくきぐまりぬとたゝえけ
きぐ。還幸せぢせ給ふ。まことにめづらしう
ぞとたちん。あづまにも。上野の國ふ源義貞といい
ふ者あり。高氏ぐ一族なり。世のみぐれよおもひ
おもひ。いくばくぬ勢ふて。鎌倉にうちのぞ
こけるふ。高時等運命きはまりにられぐ。國〜の
つはものつれちぐ。風の草をなびうに
るぐ如くして五月の二十二日にや。高時をはじ
めとしておくの一族。うれ自滅しられバ。鎌

倉まで平らぎぬ。符契を合はするがごとくなりし。筑紫の國〻陸奥出羽のはてまでも。なびき月までたづねまゐらせる。六七千里の間一時ばかりなり。時のいきほひ運の極まりぬるもうらなきことにこそ。不思議なりしかども。知らぬ者ハかゝやく知らぬ者を。摂津の國西の宮といふ。ところ〻ふるくぞ。聞ゆを。はるかにけり。六月四日東寺に入らせ給ふ。都にある人〻まゐりあつまり。ゆきかよひ。威儀をとゝのへ。本の宮に還幸し給ふ。いたゞきの賞罰のたぐめあるべしに。兩院新帝をば

ちぐめ申し給ひて。都ふるまをまゐらせ給ふ。さきぐ新帝ハ偽主の儀なれども正位にそなはられば。改元して正慶といひしをも。そのゆゑなく元弘と号せらる。官位昇進をもとゝのへられ元弘元年八月より始まりにくぞありし。平治のそのかの。平氏世をみだりて二十六年。文治のそのかの。頼朝權を專にきしよう。父子あひつぐこと三十七年。承久に義時世をとりおこなひ。すでに百十三年。すべて百七十餘年の間。おなじやうの世を一つに行ふを絶えずして。さの天皇の

清代ふ。掌城うつしやく一統しるひぬ
るもと。宗廟の清きこと時節あらくらひと。天
下おぞりてぞ。あるぞてまいまる。

太宰帥　讀方に注意
もべ〜

上達部　かんだちめと
讀む三位以上の人をいふ

上のをのこ　殿上人をいふ
昇殿をゆるされた人をいふ

ゆるり　用法の出番
注意すべ〜

○稲葉の露（つゆぐさ）草

兼好法師

兼好法師ハはじめ仕官せしが。一朝うき世を觀ずることありて出家せり。聚落とのにこうはらぬ性質にて。身を雲水におくり。國々をめぐる。又ハ都にこうちゐ。住所をさだめずしが。正平五年六十八歳にて没せり。つれづれ草ハ隨筆ちぐ〜寓意ありく。一生の氣慨をみるべし。南朝ハ

深く心をよせをれるを云ふ。

あやしの竹のあみ戸の内より。ふるわかき男の。月影を色合ひなどうちながめて。ねぐつやゝかなる狩衣にさいなきぬぎ。いとゆゑづきたる笛をとりて。ものさやうなる童一人をぐして。ばかなる田の中のほそ道を。稲葉の露をおしわけゆくほど。笛をいとうるはしく吹きすましたるは。たのもしきまでなれどきゝもてゆく人もあらじと思ふに。ゆゑのある方をまもりて見送りつゝ。ゆくゑを。笛をふきやゝて。山のきはふ總門のあるうちにいりぬ。榻をあてる

る車のうしろもづのよりい目とまる心地して。下人にらへば。もとのごとの宮のおはまし頃よりて。法佛事をぞいとなむ。法堂の方に法師どもまゐりあつまる。夜寒の風にはたそはれくる空ぐゆる物の匂ひも身にしむ心地して。寢殿より法堂の廊に通ふ女房の袖追風用意なるべし。人目なき山里ともいとゞ心ぼそうしたり。心のまゝにてもきく秋の野はいとあまるる。ふうづもれて。虫のねのごとがまくやりうづの音のごとやのかり。都の空よりも雲のゆきもはやかなりて。

月ぞ忘れぐさなる人と世づかめ。

あやし　ゆゑづきたる　うばら

上の三つの詞に注意すべし

○仁和寺の法師　一（同ドく）

仁和寺にある法師。年よるまで石清水をまづまゐりけるばかりにて、つくづくおぼえてある時思ひたちて、只一人のもちまでけり。極樂寺・高良などを拜して、かばかりのまゐりと心得て帰りにけり。さてこの人ふあひて。年頃思ひつる事はこれにもすぎぬ。さてにもすぎたるふるくさいそおはけまそもまゐりたる人ざと上山へのぼりしは。何事ならんけんゆゑのしかりしのぶ。神へまゐることそほいもれと思ひて。山まぐハ見びやぐいひける。少しの事にも先達をあらまほしきことなり。

○仁和寺の法師　二（同じく）

これも仁和寺の法師。童のほうしにちうこんこんるなごりとて。おのゝ遊ぶ事たうけるに。醉ひて興ふいるあまりすがゝはらちるたゞごちへをごうて頭よりこぼきたまゝば。つまるやうにするを。鼻をおしひらめく顏をもて入きて。はひ出でたるに。滿座興ふいる事うだうなり。ちばうれでて後ぬゝのんとひゝうり。大方ぬのれず。酒宴さいとちめていろぐ〻せんとはどひゝう。とかくすれぞくびのまはりかゝりて血さゝ。只それよそれみちていきとつまりはけきぞ。うちわうんとひきぞたやすくわきず。ひぐちなてゐへぐこうけきぞかちはぐ。ひたやゝれゝく。三つ足なる角の上よりうびゝ城うゝて。手をひき杖をつきて。京なるゝのぐうねて行きける道すぐゝ人のおやゝ見ゝ。ゝ限ちゝ。ゝのもゝる中入すて向ひ居ゐりんあゝさは。さゝゝさやうちりけめ。物をいゝふをくぐもり聲にひぐきて聞こゝえび。うゝる事ハ文にを見えず。つゝへゐる教

とゝ　といへば。まさに和寺へ帰りて。ちゝ
者老いゝる母ちゝ。枕ごみよりゐて泣き悲
めどゝ。きゝもしれぬ。ゐる所に或
者のいふやう。たゞひ耳鼻こそきれうとも。命
ばかりをゝのいきばかりは。たゞ力ばかりひ
き給へとて。わかのちごをまゐりにさし入きて
このねをへぐて。首もちぎるばかりひきたるゝ。
耳をゝしうけうげちゝぬふゝ。からゝ命ま
うけて久しくやゝゐるけり。

ごり　許ふの意

○連歌しける法師（同じく）

奥山に猫まゝといふ者ありて。人をくらふなる
と人のいひけゝる。山なゝねぐをさまゝにも。猫
のへあぐりて猫まゝるちりて人とる事はあれ
る物をとゝいふものありける。ちに阿弥陀佛と
うや連歌しける法師の。行願寺の辺よりける

がちゝて。一人あゝかん身ハ心すゞき事にこそ。と思ひくる頃しも。あゝとおろすて夜ふゝまで連歌して。あゞ一人帰りけるふゞ川のほとに音にきゝし猫まゝ。あやまゝび足もとにふゝようたてやゞてかたつくまゝに。首のほゞ切くもんこん。肝心もうせくふをゞんとけるゝ。かもちく足もたゝぞ。小川へおろびいりて。助けよや猫まゝ。よやくとさけゞ。家々より杖ゞもとをして走りようて見れゞ。此ゝゝに見おろる僧ちゝ。こハいうにこそ。川の中よりいゞきれおり

ゐれゞ。連歌のこゝけものとりて。扇小箱ちゞふゝをおろに持ちたりけるゝ。水よりいりぬ希有にして助けうたるゝまたて。ぱふくゝ家にいりにけり。かひくる犬のゝくらけゞ主をおりて飛びつきゐりけるこそ。

松　松明をいふ

○一矢ふ定むべし（同じく）

ある人弓いるさゝをならふに。もろ矢をたゞちにて的にむかふ。師のいふ。初心の人二つの矢をもつ事なかれ。後の矢をたのみて初の矢にをろそかざらん。心あり。毎度ゆゑ得失なく此一矢にちからをつくしと思へ。やいふ。わづかに二つの矢。師の前にてひとつをおろかにせんと思はんや。懈怠の心。こゝろ知らんとおもへ。師これをしる。此いましめ万事にわたるべし。道を學ぶ人々に毎朝おこしん事を思ひ。朝ふる夕あらん事を思ひて。この片のてねんおろそかに修せんさとを期すいはんや一刹那の内ふおいて。懈怠の心あるさとを知らんやもんぞ。只今の一念ふおいてだらぶちふいたらんとおもはゞ。

刹那　念ノ梵語ふて一刹那ハ一念に同ド

○兵仗の難（同じく）

○一矢ふ定むべし（同じく）

ある人弓いるさ、をならふに。もろ矢をたゞちにて的にむかふ。師のいふ。初心の人二つの矢をもつ事なかれ。後の矢をたのみて初の矢にをろそかざらん心あり。毎度ものゞ得失なく此一矢にたゞむべしと思へ。といふ。わづかに二つの矢。師の前にてひとつをむかふにせんと思はんや。懈怠の心。こゝろ知らざるべし。師これをしる。此いましめ万事にわたるべし。道を學ぶる人々に毎朝おこなふ事を思ひ。朝ふる夕あらん事を思ひて。このたゞてねんごろに修せんことを期す。いはんや一刹那の内ふかい懈怠の心あることを知らんやもんぞ。只今の一念なほいたづらに空しくすれば。

刹那　念ノ梵語ふて一刹那ハ一念に同じ

○兵仗の難（同じく）

明雪座主相者にあひ給ひて。なのれもー兵仗の難やあると。尋ね給ひ給れば。相人誠ふ其相おもしまらるゝ。いかゝ。ある相ぞと尋ね給ひ給れば。傷害のおそれおはしますゆゑ。身にてこうもかくおぼしよりてゆゑね給ふ。これすでに其おやぶこのきびしきぞと。ゆーけり。はるゝて矢ふあるべうてうせ給ひぬるなり。

西園寺實衡

○たふとく見えゝふ（同じく）

西大寺に静然上人。腰こゝぶまり眉しらく。誠に德たけゝるありさまにて。内裏へまゐられたりけるを。西園寺内大臣殿。おなたふとのゝ給ひやと。信仰のきそくなりけるぞ。資朝卿これをこて。年のよりたくふひふゝやされゝる。後日にむく犬のあさましく老いさらぼひて。毛さびゝるをひらきて。此けーたゝゆふとゝ見えゝふとて。内府へまゐらきられゝるけるとぞ。

○世にあらんおもひで（同じく）

爲兼大納言入道めしとられて武士どもうちつれて六波羅へ行きけるを資朝卿一條辺にて見ておれうらやまし。世にあらん思ひ出うらやましかりけり。

世にあらんおもひで　このいひうるに注意すべし

○たぐひなき曲者（同じく）

此人東寺の門前雨やどりせられけるに。たは者どものあつまりあそぶを。手をうちわぶゆびみうちつくていばくも不具にはやなるをうて。とりぐたぐひなき曲者ちやもつとも愛するにあらずと思ひて。まもり給ひけるほどに。やがて其興つきて見にくいぶきく

おぼえられしが。たゞぐにちかにめづらかなる物にもちうゐる思ひて。帰りて後。おのあひだうゑ木を好みて。たゞちに曲折ある枝をとめて目をよろこばしめつゝ。彼うゑ物を愛せるれりけりと。興ちくおぼえられぞ。鉢にうゑられける木ども。皆ひさしくうゑられけりをあらぬべきなり。

○雪佛　（同じく）

人間のいとなみこなへるたゞを見るに。春の日に雪佛を作りて。そこめよ金銀珠玉のごとく珍しらし。堂塔をたてんとするに似たり。其のまへをよぎりてよく安置てんやへのいとちかくを見るほども。下よりきゆるまを雪ぞとくちるうちふいをちるみやまの事はるはぐおなじ。

○儉約を本とする（同じく）

相模守時頼の母は。松下禪尼とぞヤーける。守護いまヤさうゝ事あるゝにけるふ。きゝけるあうたちゝじのやぶをばゝを。禪尼てづゝふカしてきゝはゝつゝはられられば。せうらの城介義景その日のふいめんゝく候ひゝるのたまはゝまてなたゞ一男にたゝせはんさやゝ此事に心得ある者ふはふゝやされゝまゝで。其男。尼ゞ細工によもはたらでゝちゝ一間ゞはらきゝゝを。義景。皆をはゝうへはんをゝるゝに多やはくはふべゝはゞゝにはふも見ゞるゝく

やを。重ねゝやされゝまゝば。尼も後をはるゝくはをはまうへんと思へゞをゝも。けふゞかゝはゝばゝかくてあゝゞたゝゝ。物を破きゝる所ゞうゝを修理して用ふる事ゞを。わゝの死人に見ゝるはをて心ばゝん為ゝゝゝ。世を捨さむる道。儉約をもはゝは女性をまゞも聖人の心にうゝゝ。天下我あもはゝゞの人を子ふてをたきゝゝ。誠にあゞびをゝあらゞりけゝゝゝ。

○不定なく違ひなば（同じく）

今日は其事をなさんと思へども。あらぬいそがまづつゝきてまぎれくるまに人をもはらあまたたのもえぬ人をきゝたのくゝめる方なき事はさぐひて思ひよらぬ道ばかりいうれひぬるなどばらはうつる事はこゝろもとなくて易こゝろべたこゝろいとを心ぐるしく。日々にすぎゆくまゝにあ

思ひつゝけはあぢ。一年の内をこゝろの如し。一生の間を又もこゝろのあらまし皆あだゆくこゝろと思ふ。なのばかりたゞはぬ事をあれどいよ〳〵物は定めがゝ。不定と心得ぬこゝ誠にこゝたゞのはぢ。

○事足らぬ（同じく）

平宣時朝臣。老の後普ごゝろ。最明寺入道ある

よひの間によばるゝ事ありしに。やがてと申し
ながら。直垂のなくてとかくせしほどに。又使
来りて直垂などのさぶらはぬにや。夜なればこ
とやうなりともとくとありしかば。なへたる直
垂うちうちのまゝにてまかりたりしに。銚子に
かはらけとりそへて持て出でゝ。此酒を一人た
うべんがさうざうしければ申しつるなり。さか
なこそなけれ。人はしづまりぬらん。さりぬべき
物やあるといづくまでも求め給へ。とありしか
ば。しそくさしてくまぐまをもとめし程に。臺所
の棚に。小かはらけにみそのすこしつきたるを見
いでゝ。これぞ求めえて候ふと申ししかば。事た
りなんとて。心よく数献に及びて。興に入られ侍
りき。其世にはかくこそ侍りしかと申されき。

○上人の感涙（同じく）

丹波に出雲といふ所あり。大社をうつしてめで
たくつくれり。しだの何がしとかやしる所なれ

で。秋の須聖海上人其外七人あまたもそひて。い
ざ殆へ出雲をこのみふ。のいとちひめもきんとて
ぐ七ていたるふ。おろ〳〵拜こゝてゆ〳〵しく
信おこらゆ。此前ちる獅子さいまいぬ。そむきて
うしろざまにゆちりけまぞ。上人いみじくこの
んじて。ながめぐたやさの獅子ゑ立ちやういく
めづらしふ。ふの死故あらんと涙ぐゝて。いふ殿
ばら。殊勝の事ハ此ちんじちがんびやむげちう
といへばおろ〳〵あやしみて。誠ゑ他ふ立ちれ
りけり。都のつゝ上にうちんちまでいふに。上人猶

ゆのかゝりて。おとゝく物知ぬべき顔した
る神官をよびて。さ死法社の獅子のたてゝれや
う。定めてなゝひある事に侍らんとうけあま
ちばやとゝいはまゝれば。其事にハふ。ちぐれき
ゝちべぐもゝは仕りける。奇怪ゑハふ事ちりと
てぢ。よりてきゝ忘ちゝていふゝれぞ。上人の
感涙いとづゝにちゝ。

ちるところ
めでたし

この ちるの詞に注意すべし
用法いまのと異同いうべ

○新島守一（増鏡）　作者しれず

増鏡は後島羽天皇より後醍醐天皇までのものがたりをしるせり。南北朝のはじめごろの人の筆にかゝるべしといふ。

あけぐれのころふれおかゝる我たづぬるまぼろしにたゝへ田村ちるといひしん將軍どもの事は耳ぞとゞまぐれおもはぬそのゆゑよりいまゝで。源平の二ちるがれは時ふるまりをもつにちるべしてゞ大やけの治まりゝとはなりけり。桓武天皇とぞうえしみゝぐをば柏原ゝとぞ申しけるそれ御子に式部卿の親王とぞうえしより五代のすゑに平將軍貞盛といふ人。維衡維時とてふるゝれ子孫たちけるまぐかく治のえ西八條の清盛のれとぐはそれ太郎維衡より六代のすゑちかれその一門ゝろびゝぐぞ。のごろはゝぐりふあゝこのゝきかよ治まりふめる。ぢてそれ維時がちぐゝをゝ民ゝゝて。平四郎時政といふも

のみこそ。伊豆の國北條のとりでかやうあだん
る。それも維時より六代のまごなりし。また源
氏武者といふも。清和のみかど。かうは宇多院な
りの流のちどもなり。二條院の御時平治乃
みだれに。伊豆の國蛭が島へながされし兵衛佐
頼朝も。清和のみかどより八代のながれなり。六條
の判官爲義といひしもの孫なりし。左馬頭
義朝が三郎にあんありける。西八條の入道おほく
ど。やうやう榮花おごりへんとて。後白河院をな
やましまゐらせしかば。やがてのがずおほされてかう

頼朝をめしいでて軍をおこしあまたしよ。たつの
るべき時やいふりけん。平家の人々は。壽永の秋
のあふらしにちりちりて。はてはみなつ海のそ
このもくずとなりつみし後。いよいよ頼朝ぞ我
ほこりて。ちうに君の流うしろみをつかうまつ
つる。相模の國鎌倉の里といふ所よきところなりしか。
世を掌のうちに思ひきざみ。人たすけ給へることも
なれぜ。いまちやうにぞ院のう
へ位よつのを給ひしもはじめより世のこのことと
なりて。文治元年四月。二のはしをのぼりしも。八

島の内におとゝゞ宗盛いけどりにされ賞ときこゆ。建久のはじめけうゝ。都にのぼるそれいきほひのいとうたゝしき事。いつゝゞ[illegible]。（中略）それ年の十一月九日。權大納言にたきこれて右近大將をかねあり。十二月のついたちごろよろこびやしたて。同じ廿四日やゞて法ゝの法をばうゝきゝる。その時ぞ諸國のそゝつねぶゝといふ事うけゝまはりて。地頭職は我家のつぼねをはじめあつゝんゝる。さて日本國のおとゝろふはじめきこれよりゝゝべゝぢてなづまに歸りてゝるゝ上。たいろゝのぬさおほうるもちうに。年頃もいのりもゞゞひき給ひまゝ吉水僧正。うにもゞゞうゝの座主のそほひつゝはゝる。

おづまだちのうゝふちゝそにの名ハ
君をみやこてゝ[illegible]にめかなりけり

法ゝのつゝ。頼朝。

こゝやこにゝ君をあふちのちかゝれバ
なゝうにの關ハとゝられこそをゝき

そゝゝちもまゝのぼゝて。東大寺の供養にしまうでゝゝにかゝて新院の法住のはじめつゝる。

新院
後鳥羽上皇

正治元年正月。あづまてかゝられたるゝて。同ど
き十三日に。年五十三ふてうゝれるゝ。治承四
年ゝゝ天の下に用ゐられて。ほゝとをぞうや
すゞぬゝ。北の方はちをきこえける北條四
郎時政がむしめゝ。それ腹よりのことふゝうあ
り。太郎をば頼家といふ。おとゝをば實朝ごとゝゆ。

二のは　頼朝正四位下より従二位に進みをいふ　はゝは階なり

ちゝがうたの庭主　この書よ前に長歌よみゝる人ちれバいふ

偽養　くやうと讀む

肉のおとゝぶ　肉大臣

○その二（同じく）

大將ゝうゝしてのち。兄ゝをやゝがてたちつぎて。建に
元年六月廿二日従二位。同じき日將軍の宣旨を
ゝるゝはる。又のゝゝ左衛門督になゝる。かゝれど
もをゝゝおちゐぬ心ぞへゝゝにゝてやゝゝ
つはものどもむかくにぞちゝにゝる。時政

ハ遠江守といひて。故大將のありしをりとはるく
のうしろ〻ちをしたをまいてゐまをうまごの
世ちゝしバいよ〳〵身おもくいきほひそゑ事うだ
りゝくてうけゞたるさまゝ。子二人あり。太郎
を宗時といふ。次郎ハ義時といへり。次郎ハ心もと
くたまちひまきれるもとふて。左衛門督をバふ
ちはゝ〳〵思ひて。おとうとの實朝の君よつさ
ちゝごひて。思ひかまふる事ちゞもありけり。督ハ
日にそへて人ふもそむくゝれゆくにいみじたや
まひをちゝて。建仁三年九月十六日。ゝ廿二に

てかしらおろし。世の中のゝうおろく。何事もなる
らゝうべきほゞ。ゝまゝ。ちゝをゝうけ
めをちちゝ子の一幡といふ。ゝ世をばゆづりけ
きゞうけひくものふ。入道をゝうたやまひつくろ
うゝとて。鎌倉より伊豆の國へいゞゆあびよらえ
たりゝるゝゞに。ゝの修善寺といふ所ふてつ
ひようゝきぬ。一幡もやゞてうしちゝはきゝ。これ
ハ實朝と義時と一つ心ゝてゝあばゝりける彩ゝべ
ゝさていまハひとへゝ實朝故大將のあと我うけ
つぎて。官位ゝゞ〻ゝるこゝゝれく。ゝろゞ心のまゝ

なり。建保元年二月廿七日正二位せしハ。閑院の内
裏造られる賞とぞきこえ侍りし。おなじき六年。
権大納言にあがりて左大将をかねたり。左馬頭を
さへぞつとめられたる。又みちしやがて内大臣に
なりても。ちかく大将もそのまゝなり。父にもやゝ
まさりたまひていらじうれき。そのなにがしも大か
た心ぞへだつるはしく。たゞくもやさしくをよる
ばめやれられば。さらにわりふたすぢて。かのこふ
のちびきぶつまかまと父ふをちえうり。いゝ
なることもふあるけん。

山ハさけ海ハあせなん世なりとも
君にふたごころわがあらめやも
とぞよみたる。時政ハ建保三年にかくれにしか
ば。義時ぞ跡をつぎける。故左衛門督の子にて公
暁といふ大徳あり。おやのうたれにしことをい
かでかやすき心あらん。いかなる時にうたんとの
み思ひわたるに。次の内大臣まで右大臣にあが
りて。大饗などめでたくあづまにておこなふ。
京より尊者をはじめ上達部殿上人おほくくだり
らひいましけり。さて鎌倉にうつしまゐれる八幡

の法やしろに神拜ふまつる。ゆゑいのめしき
ひぐきれまつば。國々の武士ハたちらにてもいはんべ
やらの人々も扈從しけり。だち馬ゆだのまちる
をれ見る人もおほかるる中にこれ大德うちまぎ
れて。如のまゝをして。ちろきうに衣ひきをり。お
とぐの車ようれうほどをたてのぞくやうれ
ぞみえたる。あやまるべ首をうちおとしぬ。その
ほぐのとよくいみじさおもひやりぬべし。かく
いふる承久元年正月廿七日おり。そもらつぐひ
あつまるをのぐ。ぬぐあれまるようほの

の事ども。京にもきこえめしおどろく。世の中火を
ふちたるたまれるく。扈從に西園寺宰相中將實氏を
くぶう殆ひきたちぬ人くもなくく袖をぬぐ
うてそのぐりけるいまぐ子ともなけまバゆちつぐ
べき人もなし。ちくたばまりれんほぐとて故おと
ぞの母北の方。二位殿くいふ人ふうれ子ぬもう
しちひて涙ぬれまもれくたをれすぐれをぐ。將軍
にもちひらる。のくてもたのえもいのぐにてきん
だち一ちろくぐ。ちえて將軍にもまるせ
殆てく。公經のおとぐよりしのぐをれば。あへちん

とおぼえ所ふ。九條、右大臣道家どの〳〵うへ。この
おとゝの法むすめ。そ腹の若君の二つ
ちゝ殿をくゞしきこえんと。九條殿のたまへど。
法ゝまゝちゝんもおちず事とおぼして。ちゝめ殿
ひぬ。その年の六月にあばまにゐてまる。七月十九
日ゝおはしまつきぬ。むつきのほどおとゝさ
まハ。たゞかゝちゝちゝぐ城いきひきゝんやうにて。
よろづの事ちゝぐ〳〵右京權大夫義時朝臣心のま
よちゝれど。一の人ぞ法子の將軍にちゝ殿へるハ。こ
れぞはじめなるべき。

一幡　大德　大饗　おゝやけの饗應
殿上人　神拜　扈從　尊者　大饗の時の正客
この六つの讀方に注意
きべし

一の人　攝政關白　ゝゝろ　人形

○その三（同じく）

かの平家のほろびゝちかく。人の夢ふ。頼朝ゞ

のちそそれ法たちあづかるべしと。春日大明神
おろかきられくるを。いまいまの若君の法事にこ
う有りけめ。うくて世をなびうしもくめおこ
なふこと。ほとくふるるはいえうまめ
やうにめぢまき事もおぼくちう行くに。院の
うへものびておぼしめしあるべし。ち
かくつかうまつる上達部殿上人。まいて北面の
下臈。西おもてれどいふをぞ。ふれうのうへはの
めきたるを。あけくれ弓矢兵仗のいぐるくよう
ふうれうにちづくるべ。我法らんじちる事

新院　順徳上皇
中院　土御門上皇
本院　後鳥羽上皇

さへ。いうでちらはを結へるにう。みちもれもれる
むやたちまきうてかしくれはまをば。法
前ふをよれあきちぐぢめきを殺ふうやう
のまぐまふて承久三年にちりぬ。四月廿日みか
どおりさせ殺ふ東宮四つにちらを殺ふにゆ
づりちを殺ふぢうぐろ皆おの法ぐはひまて
受禅ありつれば。これもめでたき法行末ちらん
う。同じきせ三日院號のちぐんありていまお
ちを殺へらを新院ときこゆきば。法兄の院を
ぢ中の院とヤ。父みのぐ我ば。本院ぐぞきこえ

さいくゝ。いのほどゝい家實のおとゞ關白にておはし
つまゝど。法讓位の時。左大臣道家のおとゞ攝政に
なりゝ給ふ。かのあぢまの若君の法父なり。ぢても
院のおぼしうまゝふる事。たのぶとゝきどやうく
もしきこえて。ひがしぢまふもそれ心づのひを
ぐかめり。あぢまの代官にて伊賀判官こつゝ名
といふもれあり。かつぐうれを法勘事のよ
仰をらるきぢ。みのゝゝはゐるつはもれどもた
しよせつゝる。のぶるべたやうしくて腹きりて
ゝる。まぢいをめでゝとゞ。院をたぼめけ

る。なのづまゝもいみじうあとて法ゝぢぢるべく
て身ゝゝいべたは時にこゝあぢきをおもふも
のゝゝ。討手のせめきたりゝん時にぢかるたさ
まふてこのばゝをたゝさぢ。おかやけときこゆる
みづのゝ志法ふゝくゝゝねぢ。のたを我身の宿
世をもみるばりゝと思ひちりて。おとゝゝれ時房
と。泰時といふ一男とぢふゝりをこゝらとゝて。雲
霞のつはもれをゐれびのをて都にのぼゝ。泰時
をまつにする志ていふやゝ。おのきをたのゝびぢ都
ふまゐゝる事ハ。思ふとゝゝれほ。ぼんいの

だらくきよもれ死にをんでゝ。人にうゝろ見えれ
んふも。親の顔まゝる見るべこのゝびゝ。いまをかぎり
とおもへゝいやゝはけれども。義時君の法ゝめにう
ゝろめゝれ心やハある。ちまゝばよゝちまれ死ふ
をせんゝとはあるべかゝゝび。心をたけくおもへ。
ものれうゝ勝つちゝゝば。二ゝびゝの旦柄箱根山
いゝらゆゝゝゝしぐ。ちゝくゝ いひきゝうゝ。まゝゝに
ちゝゝちゝ。まゝ親の顔をゝまん事をいとあやふ
しゝとおもひて。泰時を鎧の袖をゝぼゝ。かゝみて
いまやゝぎゝうと。あいきゝ心ゝそゝげちゝ。かくて

うゝちいでぬる又の日。思ひうけぬゝかゝに。泰時さ
だひゝゝう鞭をあげゝくゝせ來ゝゝう。笑むゝうゝちち
うゝゝくゝいうにゝく問ふゝ。軍のあるゝきやゝう大う
たのおきてなゝいハ。おゝかせれ如くそれ心をえ伝
うぬ。ゝしみちのゝうゝにをゝのうゝちるに。のゝう
ゝけゝく鳳輦をゝきだてゝ法旗をあげられ臨
幸の嚴重ゝう事をゝらんてまゝうあへゝばそ
の時の進退いゝうゝぶゝゝるべかゝん。この一事をた
づゝやさんとて。ひとゝうゝせゝうれこいふ。義時
とばゝうゝうゝちあんゝじてかゝこくゝも心をへるをれ

こゝろ。それ事ゝり。まけふ者の法興よむゝひて弓をゝくゝいとくハ以くゝのぶあらん。ぢばゝうゝ此時ハうぶゝをぬぎ。弓の弦をとりて。ひとへにうこまりをゝして。身をまゝるをまるべし。ぢもあらで。君をみやゝてゝおほゝむ。ゝぐゝら軍兵をたまはきば。命をひゝて。千人ゞ一人にゝるまでもたゝうふゞし。といひもはてぬ。いそだゝもちよけり。

勘事　軍兵

もゝくゝ

讀方に注意すべし

用法に注意すべし

○それ四（同じく）

こゝやこゝにをおぼゝまゝうけつる事ゝをバ。よゝ。ふどもめゝつどへ宇治瀬田の橋をひゝのせてかゝれをふきぐべき用意ゝゝろことゝちゝ公經の大將ひゝゝり。ゝゝ。ぢぐまぐのゝとゝぢる事にて北の方一條中納言能保といふ人のむすめ。ちゝそれ母北の方ハ故大將のはゝゝかゝちれバ。一ゝゝならば

七條院
後鳥羽天皇の御母
藤原殖子
修明門院
順德天皇の御母
藤原重子

あづまをおもくおぼしてぞいとゝきゞ院の法心のかゝる事とあゞぶれどゝり給ふ。七條院の法名うり給殿ゞ。坊門大納言忠信。尾張中將清經中御門大納言宗家。又修明院の法ばゝかゝの甲斐宰將中將範茂などつぎくあまたなくなりぬ法修法どもしかゝ。いくばくまたつ人くのほの給上達部にも殿上人にもあまたなりぬ法修法どもうゞたゝびおこれはるゝやんごとなき顯密の高僧もかゝる時こうたのもしわびたゝめれのおの心をいゝてばゝまつる法身づうゝも

いみじゝわんぜばを張ふ。日吉の社にしのびてまゝうでばを張へう。大宮社法まつり物をばゝ法念誦志張ひて。法心社ゝちにいのめき願ども我者て法を張ふ。夜すがらふけ志ばまりて法やゝろばゝごく。燈籠の光のばゝうれるほどにを法れきわゝはのふたゝけるがにはゝにおびえあがりて。院の法まつりたゞまゝりふはすまゝりて。託宣しげり。かくばけもくもかくるゝおはゝくゝれひ張へば。聞きばゝごがゝく法きど。一ときゞ法興ふりの時。ゝばけもくふをゞせ

殆ひ〻うぢ。衆徒おれのきをうゝみて。陣のかどり
にふりすて侍りちのぐ。むちゝく馬牛のひづめ
にうゝまる事ハ。いまゝゝらめ〻く思ひ殆ふる
によりぬ。のゝびのみうたゝどハえ侍ううまた
まを侍るまゝ。七社の神殿をハゞ〻ゝろがねよみ
ぐたちたんとうけたまはるも。をはゝゝけ侍ら
ぬちるりぬ。とゝく侍りて。息をたえめるちまたてふ
しぬぎ侍りめんぐ侍こゝちもれる似ずあきま
うおぼさゝゝて。たゞ侍ちるみぐのゝぐいでくる。
過ぎにちのゝさくやゝ〻ゝりかへさはほゝ。さま

ざまおこゝりかゝこはりまさせ殆ひ山の侍興
ふをだまりけんさをかゝゝ〻ゝもみづのゝた
ぼゝるゝハあゝぢりけめど。をめ一人ふとい
ふゝん事にやとうぢちたる。中院ハあゝでくゝ
ねをすゞ殆ひより。言に出でゝこそもれ
たまはゞど。世のいと心やまれまゝたかやう
の侍さわぎふとちたるはゞゝらひ殆ハざめり。新
院ハおちゞ侍心にてよろぢ軍ぢ事ちぐもむき
ておほをゝかれゝ。いつぢ年よりも五月雨をれ
まゝくて。富士川天龍ちどえもいはゞみちぢり

さわぎて。いうれる龍馬もうちわらはがさられバ。せめ戦ふる武士どもあやまりくれやめりかうしどもつひに都ちのぼりくよりきこゆきバ。君の御武者もいでたつそれいきほひ六萬餘騎とうや。宇治瀬田へわりもちはのはし。世の中ひびきのゝちちまち。言の葉もおよばずまひびゝて。あらはふの乾山へふげらもり。遠きせいてたちくぶり。すゝてやいぶれくさわぎみちゝり。いうぶなのらんと君も法心みぶれておぼまどゝ。うねていふあけくゝえて人ゝも。まゝとれきはよ

ちりぬれバ。いとゝ心あわゝしくゝを失ひさるさまどもだれもしげきる。六月廿日あまりにや。いくばくのたゝうひだにちくて。川ひにみうるの軍やぶれぬ。荒磯にたのほちるぶれさゝくるやうにて。泰時と時房とみぶれ入りぬきバ。いをんうゝれくあれきて。上下たゝ物にぶあうまぶどふおづまりいひおこびるまゝ。かの二人の大将軍はうゝひおれてゝ。保元のふあゝやゝ。院の上都のほうにうつるべし。ときこゆきバ。女院宮々。所ゝにおぼまどゝ事ちれり。

本院ハ隠岐の國ふかはまにぐうしバ。まづ鳥羽殿へ綱代車のあやーげちるにて。七月六日いらを殺ふ。ぶくふをとうぢりて法あり。れあきまうありきちり。物ふもがちるや一とかぶちるもこうしちるぞ。それ日やがてぎぐたろ法と一四そぢに一つ二つやあまうを殺ふらんまぐふとをーるべ法ぶごちり。信實朝臣めーて法すぐるうつーかうきうる。七條院へまうを殺はんとちり。

御修法　祈禱の佛事なり

ものにとぐれや　こうのうす

讀方ヨ注意すべし

顯密　佛法に顯教と密教の別あり

念誦　讀方ヨ注意すべし

ものにとぐれや世の中をあしちぐうれてまぐ身とおもをハん　とよみ

古歌を本歌とし

○それ五（同じく）

うくて同じき十三日に法舟ふまりて。ぱるうれる波路をーのぎおはまんぱぐーちぐ。この世のた

なゞ法身ともおぼされば。いみじう。いうれう什る代ゝのむくいふこゝろ。くゝらめ。く新院を佐渡の國ふうつゝを移ふ。まことや七月九日。みかどをたゝろ。すゝきこの卯月ごろよ。法藏位ゝてめでゝかゝしに。夢のやうなり。七十餘日にてたゞ移いる考めゝもいまやはじめ。ゝらん。もろらにぞ。四十五日とうや位よおはしをれいあゞけるとぞ。かゝのふゝとよみし人のいひゝゝちひゝゝそれもかやゝゝ。ぶれやありけん。さて上達部殿上人。そもよりゝもはゝ殘ゝれく。この

事にふれにゝ。ぐひゝ。おもくかゝろくてゝゝあたゝちまいみどげちゝ中院をはじめよりもろしめさぬ事れきば。あばまにもとごめ中さねど。父の院をるかにうつゝを移ひぬゝるにのぐうに。ゝ都ゝてあゝん事いゝおそれありとおぶされて。出心をゝそ。年ゝふ十月十日。土佐の國のをゝをいふ所ふゝゝを移ひぬゝぞ。きゝぎばゝうにや。若宮いでゝ。承明門院の法をうゝに。通宗の宰相中將ゝて。ゝのくてゝを移ひふ人のむすめ。ゝ法ゝゝれゝ。やゞてかの宰相

のおとゝとに通方といふ人の家にとゞめ奇ゝ
殆ひてちゝのくにぶゝひゝる北面の下簷一人召
次ちゞばこゝりぞ侍ゝとまつりけるいとく
あやしゝ侍手輿にてくゞつを殆ふみちびゝ
雪のちくゝし風ふきあまをふゞきしてこゝろ
いとくきさもみえぐいわをあへゞるとは袖をい
たくこほりてゝちきさとくたかかるゝ。

うちせゝこはかゝれとてゝゝまれゝめ
ゝをわりちゝぬゝゞれゝぶゞゝち
せめてちゝのちゝゞにゝ。あづまより奏したりけ

きゝば。後にゝ阿波の國にうつゝを殆ひにきゝて
もゝのたびの世のあゝりちまぶふいとゝうゝてく
ちをゝきわざちゝゝあるハ父の王をゝしちゝふゝ
めゝだに。一万八千人まであゝりゝとゝそ佛も
とゝ殆ひたゝめれ。まゝて世ゝぶゝりてゝちもゝろと
ゝにゝ日の本にゝも。國をあゝそひてたゝうひを
なゝ事ゝゞゝ侍ゝゝゝゞゝゞゝゞそれをゝれ一ふ
ゝ二ふゝのよせハあゝりけん。ゝハすぢゝゝれ
る大臣さゝでゝおゝやけゝゝちゝるゞきちぎゝ
のきゝゝのたゞひめに。世よへだゝすてゝそれう

故院
後白河上皇

らうのすゑちかよりたとおもふるれうけうぃまのやうにむぐの民とあらそひて。君のふろびぢへるるあめ。この國にもいくあまたも聞こえざ。ぬるうぢまぐ兼平の將門。天慶の純友。康和の義親。いづれもうちまけかりくるしど。宣旨にも勝さぢすもた。保元ふ崇德院の世をみぐり殆ひ。ぐに。故院の法くくるるまてくうち勝ち殆ひ。うば。天照る御神も。みをけそ川のおれ。ちぐ。きとやーれぐ。らなる時のみぐ。ぐ城まもりたまはける事ハつよたちぐくりとぞ。ふるき人こもたらえ。まる信

頼の衛門督。おほくくれく二條の院をおびやかしきりしもつひはむちたらばねをぐみちれふとりにきてられくるる。かくきバふりにくやをおもふにもなるさうとしいうでか上皇今上のまるおはまん王城の。いくぢくふほろぶるやうやハあらんとたもくくそおぐえ。ぃが。くいくあやちもぐのいできぬるハふの世ひとつのことにもあくぢくめぐ。まひのおろのれるまつくハちるいねあやーか。四つふて位につき殆ひて十五年おはまもたり給ひ

て後も土佐の院十二年。佐渡の院十一年。ちぼ天の下にをおれて事ちりしうばずごて三十八年ぐかごこの國のあるじとして。萬機のまつり事を佐心ひとつにまをちめ。もれつの佐をちさぐへ給ひしそれかごこふく風の草木をれびうんよりもまされる佐あり佐まにて。遠きをあゝきゝ迄き城ちで佐ゝ佐めぐみ。雨のあ一よりも志ぐれば。津の國のたいやのひまれきはゝりごををちたちめにふる。難波の芦のみぶれぢらんことをおぼ一きぞたいやれ山のうねの松も。やうく

杖をつゝねて千世にハ千世をうちる。霞の洞のゆずすまひいく春をへるもそらゆく月日のかぎをもちびのぐけくおはまぬべうりちる世をあゝてよかき一ふにいまハかく花の都をちゝきちわのきたのがちぐふさんらゝ磯の苫屋に軒をれらべるおのづの事とふ物ちてハ。浦に釣をゝ海人小舟塩やくけぶりのちびくうゝ我ゝ。我ふちれちるべにだかり。かが名すだちを佐ゝふ佐ずまひごもハ。それまでと月日をかぎりたらんだふ。あにちぬ世の

うしろめたいと心ぼそうるべしまいていつをばてさのめぐりあふべもかぎりだまもなく。雲の波煙の波のいくへともしらぬさかひよりをつゝ殆ふべきさまどもくちもをしといふもおろかなり。

みもすそ川の　同じ流れ

の序詞

難波のあしの　みぐれ

序詞

津の國のこやの　ひまなを

の序詞

○そもそもおほはまに所ハ人ばもるれ里とうちもの島の中ちかう海づらよりハはるかにひきいりて山うげうかとそへて大きやうれる巖のそばぞてる城たようにて杉のはら芦ふける廊かどゝゝきばうりたとそゝろぶとに柴のいほりのたゝずばとこのりそめにうえたる法やどりかまどぢ

（同じく）

るかぶそ〻れまめかし〻。ゆゑづきてきちをゑへり。水無瀬殿おぼしいでるを夢にやうふちんばるぐ〻と見やらる〻海の眺望。二千里の外と称りなれたけ〻ちはく。ぱいまさらめもるる。きを風のつ〻さちく吹きくるをもてめて。

我こそはにひきまもりよ隠岐の海の
あらたなる風ろろしてふけ
おちぶよたに又すこの江の月やうん
ふこそうよそに隠岐のしまもり

年を帰りぬ。ぱ〻。ぱらく。あはきれるおとをのみおぼしちげく。佐渡の院あけくれ法おこれひをもちこ法ひつく。なぶさうとをおぼする。隠岐ふた。浦よりをもちのはるぐとうにみるれるそらをなごえ入りて過ぎにしうかきつくしおもほいづるにゆくへなれ法渡のこぐとどまらぬ。

ぐやまちるの花日新の春よあひて
ちくくむ海人も袖やぬらん
夏ふちりてかやぶきの軒端に五月雨のちぢく
いと所をもてゆ法ぐちるれぬ法ぐちにさよ

うはりてめづらしくおぼさる。

あやめふくかやの軒端に風すぎて
ちどりなくおつるむら雨の露

をつ秋風のたちて。世の中いとゞ物がなしく哀
けさまさりて。いはんかたなくおぼしこがる。

故郷をわかれぢふかおふる葛は葉に
秋はくれども帰る世もなし

あとゝへおくなづ名をれさせ給へる夕ぐれ
よ。おきのかゝて。いとゞちひさきもの葉のうかべ
るとゝえておぎくるを。海人の釣舟かと法らん

びゝほどゝて。都よりの使消息ちりけり。墨染の法
ころも夜の法ふかまるしゞ。都の夜さむに思ひや
りきこえさを給ひて。七條院よりまゐる法ふ
みひきあけさを給ふよりいとゞいみじく法むと
をせきなのゞるおもちすまゞ。やゝたゞうひて見
給ふよおさはしくもかくて月日へて久る事。け
ふあるとも忘ゝぬ命のうちよ。いま一ぢびいら
で見まうてちづるゝ。のくしゞらは死出の山路を
こえやるべゝを法らでちゝなどいやおぼくみ
だをかき給へるを法ゝのかにむ。あてゝ。

さらしもとれきえやらで待つ露の身を
風より先きさらいいのでらはまし
やほよろづ神とあハきめたらもとれ
うき待ちえんゆたえぬ玉の緒

初雁のつばさにつゝつ。さらかしこうあはき
れる清涼息のこつゝよハきるをぼらんびるて
つけてと。あさはゆーういみどき清涙のもようし
ちう。家隆の二位を新古今の撰者まもめくは
へられ。大うと歌の道につけてむつまくめ
つうひ人ちれバ。よるひる戀ひきらゆる事か

ぎりれ。のれ伊勢より須磨にいりけんをかく
やとおもほゆるまでぶたるのきねてかきつゝ
まゐらさる。和歌所のむうの面影うびく
うわびまがうう。れどやーてつれ命のけふま
でけるいとのうめきよれど。えをいそび
あはまおろくて。

寝覚して聞うぬをたてわびーきハ
あういうちるみのあかつきの声

とあるを法皇といみどとおぼーて袖いう
ぎぼうをたまふ。

浪間ちる花隱岐の小島のはまびさ
久しく見ぬこやこへぐて
わが〳〵の隱岐のそま山ふきをきり
あらくもをれてもれ出る波
をり〳〵よりをる海藻でをのれあつらん
て。修明門院へまゐらせをる。ふそのゆ中て。
水無瀬山わがふる里とハあれぬるん
籬ハの〳〵と人もかよはぐ
かげ〳〵をる人とあらばや事とはん
隱岐の〻山ずり杉はこゆまぐ

限あるをばさてもたへぬる身なれども
民のゐらやり軒をちらぐく
かやうにぐぐひすづておほくきこゆまぐ。され
こハ年のつもりにえちん。いまゝおもひいでぐ
ついでもとめてゐて。

消息　讀方ふ注意すべし
玉の緒　いのちをいふ

伊勢より須磨に　源氏物語の古
事六条御息所の伊勢にありて須ア
ち源氏の君に消息をり給へることあり

○紀行のうち　一（十六夜日記）　阿佛尼

阿佛尼は、大納言藤原為家卿の室なりしが、順徳天皇の御后、安嘉門院に仕へたりし。故安嘉門院の四条とよばるるが、後尼になりて、その名を用ひたるなり。夫為家の遺言によりて、家傳の歌道を、為家の子為相と、つぎのせんとて、その養育に道に專ら心をくるしめけるが、故ありて家族のうちにその傳来の知行所を奪へるものあり。しかるに理非の裁判を請はんとて、女

ちがらと家のこころ、遺言のこころ、子のこころ、ふかくなどと、鎌倉にして旅立せり。十六夜日記はこの時の紀行なり。

廿八日、伊豆の國府をいでて、箱根路にかかる。いまだ夜ふかくて、月はあけぬ。

玉くしげ箱根の山をいそぐかな
なほ明けがたき横雲のそら

足柄山はみちとほくて、箱根路にかかるなり。

ゆのさとをすぎてそばだつ

ようにちゐぬる足柄のやま

いやちこのき山をくだる。人ゑ足をこぶまりぐ

たり。湯坂ぐらいふれる。からうでてこえはてた

きば。まる〳〵麓に早川といふ川あり。まこにちや

し。木のおほく流るゝ城。いのにと問へば。海人の。

藻塩木を浦へいざちんとてちぐひちり。といふ。

東路のゆさかを越えて見るきば

ちゐ木おぐるはやのはの水

湯坂より浦へいで。日くれのるにこまるべ

き所ちほし。伊豆の大島までみわたちゐ海づ

らをいでとかいふ。と問つど。ちりたる人を紋

し。海人の家ゑとぐある。

あまゑもむそゑ黒の名もちる浪の

よひるなぎちふ宿やうまし

まりこぐはといふ川をいやくくてただちわ

たる。たよひる酒匂といふ所にとぐまる。あれハ

鎌倉へ入るぐし。といふちり。

廿九日。酒匂をいで。濱路をはるぐとゆく。明

けそれるうみづちをいやほろき月いでぐり。

浦路ゆく心ぼうさを波間より

いでゝもゝゝゝるありなんとて月
ちぎりふよせのへる浪のうへてちりたちて。あ
まゝなりつる釣舟こえびちりぬ。
あまゝ小舟こぎゆくのたをみをどゝや
浪ゝ遠ちそゝふ浦のあちぎり
みやこ遠くへだゝまはてぬるとちゝ夢のちゝ
もゝて。
たちはちれよと深波ハうけもせず
むゝ人のもおれど　ちりぬ
東にてすむ所ハ。月影のやつとゝいふちる。浦ち

うの松山とやにて。風いとあゝゝ。山寺ゝうゝはゝ
ちれバ。のゝかゝゝくゝて。波の音松の風たえゝ。
みやゝゝおとづゝ。いつゝかゝゝおゝつのれゝ
どふゝゝ。うつの山ゝてゆゝあひゝゝゝ山伏の
ゝゝに。いとづけやゝゝたゝゝ人ゝ法ゝゝ。
たゝゝれるたゝにつゝて。あゝゝ法ゝゝゝを
おぼゝて。
さびがゝもなみぢをそへてうつの山
ちぐれぬひまもちぢちぐるらん
ゆくゝゝくあゝぐゝいでゝいさゝひの

月やおくれぬうつみするべき
こやらをいでゝたとも神無月十六日なりしの
ぞいさよふ月城にぼりめ　わけきぞりけるて
やとゝいとやちゝくあつまきにてだぐらに返り事
ばくうをぐ又きこゆる。
めぐりあふ末をぐたのむゆくちく
空にうとのまゝいさよひのつき
前右兵衛督の法むすめ歌よむ人まて。勅撰にも
きびくく入りたまへり。大宮院の権中納言とも
こゆる人歌の事ゆゑ朝夕やゝちれしのばふや。

道のほどのおぶつうれさなぐおどづき絵へる
文て。
ちるぐゝおもひこそやれうびごろも
なみぐちぐたぐゝいどやいうて
返り事に。
おもひやきあとちぐれひとつにて
山路はけうしゝ神のゝづくを
此せうこに為兼の君たゝ。おちぐちまにたぐつの
ちちなど書きて。
ふるちこそ時雨てたちゝ袖ごろも

いたふやいやぐ　ちえまちらん

返し。

たびだろも　淌うぐ　ちえて　神と　月

ちぐ　ぐ　雪と　雪ぐ　ふり　そる

國府　讀方に注意すべし

ナ小木　薪を燒く材料の木

うみづを　を支字に注意すべ

うつて山　よて　いきあひたり

元元　こて山にて都にゆく山伏にあひて

ふこたどづけたくるるものにあり

○それ二、（同じく）

式乾門院の清楠筍殿とて　ゆるいハ。久我太政大臣の清むしめ。これを續後撰　ちちつづき。こて　びこたびの家くのうちぐ　にて。歌あまいり　給へる人ちれバ。清名をかうれ　ちくいうハ。いま　ハ安嘉門院ま清ぐ　ちて　ちぶらひ　弱ふ。東路お　もひ立ちなしこて。まのうヤーて　よ　に。北白　川ぐの　まみうし　ぐ。みえ　ちを　弱ハ　ぐりしう　ばいよひばうの　出でたち　物さわぐ　くて。か

くさぐさにきこえあつめいろだいでにを。心てうらうておとづききこゆ。草の枕ちぐら年ふ〳〵暮れぬる心ぼそ。雪のひまれさちぐ書れあけめて。

きえ〳〵ちぐのむる雪もかれくれて
ほのぐ〳〵ハ雪ゐるゆきにちりゆく

ちぐれこえたりしを。京ちのつりそれ法返り事。たよりあらばと心にこのけまゐらをけらをを。ふハちはしの廿二日。文まちえてめぐらしくうれしきまづ何事とこまかてゆ〳〵たくんふにこよ

ひい法かさたぐ〳〵のざやうぐうの法ぐ〳〵さて。まだるほぐにてたもふばかりもいこのぐとぽいちるこ。法施あひとそて法まゐるあけける日しと。嵯殿の紅葉見に必てわのもに人くさそひる志ぐに後にこうかゐる事どもにこえひしこのれぐやかくこと法たづよれはぐ。

ひとるこよ袖やぬまゐ施ごろと
たつ月をきかぬうらみちりをバ

さてとそれより雪にちりゆくとぐ。はかりの法返り事ハ。

この秋くしゆきふるそらぬちがめにも
ほぞいくもゐのあはきをぞちる
こあれば。こゝろぬぐびハ又だつ日をもちぬとある。
清返しばうりをぞきさいゆる。
心のうちなにうもん祐ごろも
たゞ日をだふもちゝびぐふにて
曉たゝうつのゝと知てよもひぐうれきゐて都
の文どもかく中にさいこふへだてれくあはきに
あれこかはすだる姉君にをきれき人〳〵の事さ
まぐ〳〵かきやるうぐ例の波風をげしくきこ

ゆきばたぐいまあるまゝの事をぞかきつけ
る。

夜をひぐうれぐもふみとかきたのゝび
いろさす風ひとうれきゐて
又れれ　さはふて。ふるさとにを戀ひちのぶた
ゝうとれ尼上にをふみまうゝて。いうもれちぐ
のはゝぐもいさゝかはゝみあつめて。
いたづにめかゝちゐやくはさびまも
こゝひ　やちまゝ里のあまびと
ほぞ〳〵てさのれこぐひふうれ返うゐふをいね

あちらこちらてみまバあねぎみ。
たまづさをこゝにたるみづのかゝるを
いろこゝろはきくさいちてて
こゝに姉君ハ中院中将と聞こえ人のうへ。
今ハ三位入道とうだちなどせちがゝるほざかり
きゝ〳〵おいたちしるゝる人ちゝ。ゝにおこゝろの
君をめかりちゝかやくとあゝ返り事ちまぐて
うちつけて人こゝろふるれこだのうみハ。都にをま
くゝにちゝるたゝ〳〵てなどやちくゝのちて。
をろをふめかりちゝやくゝゝれらバ

ちゝの〳〵そでに波ハうけどを
ちの人と安嘉門院にちぶ〳〵しちゝ。つゝまく
ひゝるおいとぶを思ひつゝねてかきゝるとゝいゝあ
きれまちをかしゝおごれく年くれて春にをちゝ
にゝゝ。霞ゝめたゝるちぶんのたどゝ〳〵さゝ谷の
戸ハとちゝ氣きどゝ。鶯の初音だにをおゝづま
こびおもひちれよ春の空いちのびがゝくむ
うのゝこゝきほどにを。又ゝやゝれたゝ
ありとつげたゝ人あれど。例のゝゝろぐ〳〵ゝ
文かゝ中にいさよふ月とれとゝびき路ゝ〳〵人

の清どかう。

おぼろなる月はみやこにかすみつゝ
よゝ南うざやもちさらによるく

ちぶ。そこはうかれきものどもをのもきこえたり
をだ。うれるあよりつゝはて。清ゝ返り事をい
たゝかぶとへび待ちは見をてまいる。

ねゝれぐちるうやうの月ほ身ふそへて
ちきぬまくゝにちるみのよるく

権中納言に君ハ。まちぐるゝとしく歌をよみ給
ふ人ちきば。此かど手習てきゝる歌どもかきあ

つめてまふ。海ちの記所おれぞ。貝ちどひろふを
ゝをなぐちの涙なゝねだちぬほちにけきちて。
なぶこのきて。

いふてきぶゝやこをわすれ貝
ちゝにひまれくわをぐぐくふ
ちゝぶゝ浦やまのぞと梅ゞ香を
ゝやゝに似ゝるのあけぶの
ちれぐちるがめてわる浦ゞぎて
うすみたぶよちゝにれよつき
あづまぢの磯山ゞぎにえまよう

ちるみさへさるのおもをのぐるつ
こやこ人なもひもいでバあづまぢの
ちるやいうにとおどづれてま
ちぶ。たづ筆にあるのをておもふまゝ。いそもと
るつのひとて書きちきやうちりを。又ほぐ
ぶ返り事ちなへう。日ぶろのおぼつのれきと。こ
の文ふ霞ちれぬるちちてちぶたう。
ゐれむぞよ汝干にひろふうつをぶひ
このひたるれこの事ちつるよを
くゝぶ見よかぶこれちちの春の月

晴きぬこゝろれれ。ちぶめを
ちゝちこれいろをひとつよ散る花を
おもひやゝるさへおものげゝ
あづまぢのちゝ城こてを忘れびい
こやこのはちを人やこはまし

式乾門院の御撫筍殿　讀方

に注意すべし

このくれなくこそハ　ほいる

うこそ　これらのこその下の畧

語ヿ注意べし

かたさがへ　忌むべき方角を避けち
げて他の方角にゆくをいふ中古より
おこなはれたる風俗なり

手習　あそびがき

○そゝ三（同じく）

やよひの末つかた。わづかに二たびよなりぬおやゝ日すぎふおこるたゞ三たびよちるうちをれそたる心ちしてたる心ちしてべたあつきよりおきゐて。佛の法まゝ〳〵て心を一つにして法華經をよゝりそたちるゝふやゝ

ごろもをくおちゐるをりしもみやこのたよりあれば。かゝる事こそなどぢこへをつげやるついでにきいの権中納言の法ゞ〳〵たびの空よてあやふきほどの心ぞそちもさくにさつ法法の志ふやゝふまでハこのけどめて。

とかきて。

いそづたに海人の志ほ焼くけぶりとも
あれは見まこのゝそよ消えちゐバ

とをくえたりしをおどろかして返り事とく給へり。

きえたまぎれるかの浦路は年を經て
ひろうをそそぐる海人のもしほ火
法經のちるいとはたゝかくて。
あれもちる身にそゑ友とちるにゝ
きへちるは法の華のちぎりは
如月ばかりめつらしきよりあれば。又おちず人
の法許へ。こぞの春夏のたひ。さしぐかきて。
見へ世こゝろかはらぬ人ぞ
まよりなつよりけるたずゝと
夏衣をやたちのゝてこゝやこびと

いまや待つらんやまほゝだす
そゝ返り事まゝあり。
くゝをあもちる年みまふこのはゝねど
ありしにも似ぬさゝちのこゝろく
さてほゝゝだす法だつこゝろ。
人よりも心つゝてゝおとゝぎゝ
あぐ。こゝろをゝふぞ聞きつる
實方中將の。五月まで時鳥きゝでみちのくたよ
り。みやこにもきゝふるゝらん時鳥聞のたれる
の身こゝつゝけ。このやゝされるたとのひ

ふるさとをとゝ〳〵ありとおもひいでられて。この文こそたゞにやはり〳〵くちどのなれておこさ殆へうぢゝるほゝぐに卯月の末てゝ〳〵けきバ。時鳥の初音かのうにをおもひゆえうゝ人づてにきけバ。比企みやつといふ所よあまる聲ゝきゝる城人聞きたゝ。ちゝぐいふをきゝて。

ちゝびねをひきゝやつおる時鳥
くゝをゝるたゝくいつのちゝん

ちゝぐひとゝおもへどもそゝれゝひもちゝ。ちゝよゝあづまぢハ。みちゝおくまでむゝ〳〵より時鳥

まゝちゝなゝひとやあゝゝん。ゝちゝよ又ちゝうびハよゝ〳〵まゝふちゝく人あゝけるさそ。人ゝちゝけるゝゝ心づゝゝゝゝゝゝゝまゝ。ゝゝまゝ和德門院の新中納言ときこゆるハ。京極中納言定家の清むすめ。深草の前齋宮ゝきゝえゝゝ。父の中納言のまゝをおきたまゝるまゝにて。年へたまひゝゝゝ。此女院を齋宮の清子にちゝてまゝゝ殆へゝゝゝゝゝばゝゝてちぶらひ殆ふちゝ。ゝゝ殆身こゝのゝをかゝ舟。ちゝよゝ殆へゝゝ。民部卿のすけのきゝとゝてゝおはゝゝ。ゝる人の子

にて。あやしれ歌ようて人にきのれどあち
ぐちにつみ結ひしうど。はるのれるたびのそ
らおぼつかれさり。あはきちる事ども我のれつ
づけて。

いつばうるをもふ鶴の飛び別き
ちらはぬたびのそらにちくらん

と文のかきそばよけてぐはけて歌のやうにとあらび
のれちり殆へるも。人ようちるざるちらびお
ぶゆ。はる返り事ハ。

それゆるよとびるかきてとの　ゑびの

故入道大納言為家

ときこゆ。それついぐる。故入道大納言くちのま
くらにたちそひて。夢ふみえさを殆ふよりち
ぐ。かれ人ぐかりやあはきもおぐちんとて書
きつけてなる。

こやこよでかくるもとは一思ひ寝よ
ちのぐむうれ由ゑのちぐるを
たかるやたびねの夢れまひきて
さむきぐこえぬ人のおもうげ

ちぐ書きてなりしを。又あちぐのちにたよりたげ

ねて。返り事し給へり。ちしもとゝびゐまゝ
をもゝかゝゝ。ゝゝけり。
あづまぢのゝ所のまくらゝ遠ゝれど
うゝれば夢のもゝいふ人への夢
いづくよりたびねの夢よかよふらん
おもひおもてる所をゝゆめねて
ちぐのたまゝゝ。

ゝゝはやゝ　瘧病

法華經　經文の名

和德門院　讀方に注意すべし

あゝゆめ　鶴ハ芦間ニあそ

ぶもれちれバいく

ちすぐに　用法ハ注意すべ

ゝたづねゝゝ　ゝゝゝれる

文に注意すべし

○そゝ四　（同じく）

夏のゝごをあやしゝまでおゝづきもゆえてゝおゝ
ゝゝのゝゝさゝ一ゝゝゝゝゝゝ都の方ハちゝの浦波
ゝゝちゝ山。三井寺ゝゝさわぎちゝ南こゆるゝいゝゝ
おゝつゝのゝゝゝゝゝゝゝて八月二日ぞ使まちえ

侍從の宰相為相

日ごろよりおきたりける人こそ文ども。ごりあつめてみたる。侍從の宰相の君のもとより。五十首の和歌をよこたりけるとてきよがたもしあへば下さるしうり。歌もいとをかしくちりにけり。五十首ふ十八首。点あひぬるもあやしく。心の暗のひがめこうあるらめ。それ中に。

心ぞこへだてびとてたびごろも
山路このちるをもとめしらくも

とある歌を見るに。旅の空を思ひおこせてよまきたるにこうはと。心をやりてあちらしちきバそ

の歌のこうさはらに。文字ちひさく。返り事をごがきこうしてやる。

こひちのぶこうこうやたぐふ朝夕り
ゆきてハこのくるをもちぞしこうる

又おなじ旅の題にて。

こうこめぞ草の枕のよなくをを
おもひやるにも袖ぞつゆけき

とある所ふと。又返り事をそのそへたる。

秋ふのき草ぞ枕よわきぐれく
ふりにてこちの玲中の言を

又これ五十首の歌のおくに。言葉をのせそふ。大
うの歌のさまなどもつるつけて。おくにむう
の人の歌。

これを見バいとのぼうりかと思ひつる
人ふのはりて言こゝろもうるれ

とかきつく。侍従のたとゝと。為守の君のもとよ
りも。三十首の歌をおくりてこれも点あひてわ
ろかゝん事をこまゝにちるべ。といそれた
り。いとゝ十六ぞゝ。歌のくちれきぞやは
くおぼゆるも。返すゝ心の暗とかゝはらいと
くちゝん。これも旅の歌にをいちるをおもひてよ
みゝけりとゝゆ。下すゝ。ぞれ日記をこの人
人のをゝ〳〵はゝのはたりをよまれたりける
ちめり。

立ちわゝれ富士のけぶりを見てもなゝ
こゝろぼそされいうたそひゝ
まゝいまも返〳〵ぞうたつく。
うゝめに立ちわゝれても子を思ふ
おもひを富士のけぶりとぞ見〳〵
まゝ権中納言の君いまやうり文のれて。下りた

まひ。後ハ歌よむ友も多くて。秋ふかうてをい
とゞおもしいできこゆるまゝに。ひとり月ぜの
みちすがらあかし。ちゞ書きて。

あづまぢのそらも見つべきこゝろみゞ
ちぬぶまでくるにくまる月かな

六の巻に返り事。これもふる所とのこゝろさしど
まさて。

かよふらんこゝろの中の月見ても
うらもつてきたるでちゞの名を

こゝやこゝ歌ども。この後おほくつもりたるまゝ

ゑてつくゞし。

山　比叡山をいふ
点あひぬる　点にのれる
をりふ

よまれたるにこゝろハ　この下の
略語ふ注意すべし

歌の口　歌をよくよむをいふ

古文讀本一の巻終

明治三十二年五月二十日印刷
明治三十二年五月廿四日發行

一卷定價金廿五錢

選者　大和田建樹

發行兼印刷者　大橋新太郎
日本橋區本町三丁目八番地

東京日本橋區本町三丁目
發兌元　博文館

版權所有